

遊歩者・記憶・集団の夢

—ベンヤミン『パサージュ論』による記憶論構築のために—

神谷英二

要旨 本論文は、ベンヤミン『パサージュ論』を手がかりに新たな哲学的記憶論を構築するための第1研究と位置づけられる。この論文の問いは、「遊歩者は集団の夢からどのようにして目覚めるのか」である。遊歩者とは、ベンヤミンが「19世紀の首都・パリ」に見出した、目的をもちずに街路を彷徨う人物像であり、それは「観察する人」であると同時に「陶醉する人」でもある。そして、「集団の夢」とは、進歩を信じてやまない19世紀という時代の集合的意識が見る夢である。群衆は、この夢から目覚めることはないが、遊歩者には「弁証法的形象」を構成しうる商品を通路として、「認識が可能となる今」である覚醒の瞬間が到来しうる。この覚醒は、「想起のコペルニクスの転回」と呼ばれ、「歴史的唯物論」による歴史を構成する「歴史学の新たな弁証法的方法」となる想起でもある。そして、遊歩者は「歴史の主体」になりうる存在者でもあることが明らかになる。

キーワード ベンヤミン、『パサージュ論』、遊歩者、形象、集団の夢、想起のコペルニクスの転回

序論

越境の人、つねに「敷居」(Schwelle)を越えてゆく人、ヴァルター・ベンヤミンの遺著『パサージュ論』。私は、この書を新たな哲学的記憶論を構築するための手がかりとして読解する。ここに開始される研究の第一歩として、「遊歩者は集団の夢からどのようにして目覚めるのか」という問いをたてる。

本論文では、まず、遊歩者について、主に『19世紀ラールス百科事典』と『パサージュ論』に依拠して概観する。次に、ベンヤミン哲学にお

ける重要概念である、「形象」と「弁証法的形象」について論究する。さらに、『パサージュ論』において語られる「集団の夢」とそこからの覚醒について考察する。そして最後に、「想起のコペルニクスの転回」について言及した上で、結論を導くこととする。

1. 遊歩者

「遊歩者」(flâneur)とは何か。遊歩者とはいったい誰のことなのか。

遊歩者とは、ベンヤミンが「19世紀の首都・

パリ」*¹に見出した、目的をもたずに街路を彷徨う人物像のことである。これは、19世紀初頭にパリの街に登場した、有閑なブルジョワ階級出身の男性である。*²

遊歩者について詳細に考えるために、まずは、『19世紀ラルース百科事典』の記述を見てみよう。*³

『19世紀ラルース百科事典』によれば、そもそも、「遊歩者は怠け者の一様態である」(Larousse 1872, 436)とされている。しかしながら、同時に「遊歩者の怠惰には、独創的で芸術的な側面がある。」これは、特定の職業に就くように、「遊歩者になる」というようなものではなく、「遊歩者であることができる」だけである。そして、真の遊歩者が見られるのは、ほとんどパリにおいてのみである。「比類ない活気、人の往来、活力が行きわたっているこの都会は、不思議にその反面、暇人と怠け者と野次馬が一番多く見られる都会でもある。」(Larousse 1872, 436) [M19, 5]

そして、遊歩者と店頭に並べられた商品は興味深いつながりをもっている。「まず目抜き通りに遊歩者たちがいて、彼らはマドレーヌ教会とジムナーズ座の間で全生活を送っている。毎日彼らがこの狭い区域にやって来て、決してこの範囲から出ず、ショーウィンドウを眺め回したり、カフェの戸口の前で、座っている客を数えたり……するのが見られる。彼らは、画廊のグーピヤやドゥフォルジェが新しい銅版画や新しい絵を陳列したかどうか、バルブディエンヌの店が壺や群像の位置を変えたかどうか言うことができるだろう。彼らは、写真館の装飾を全部暗記しており、どんな看板が並んでいるか間違えずにそらで言ってみせることだろう。」(Larousse 1872, 436) [M18a, 3]

それでは、いかにして遊歩者は、「独創的で芸術的な側面」をもちうるのか。彼らがぶらぶら歩きながら、何を見ているのかが問題なのである。

「そうした遊歩者の見開いた目、そばだてた耳は、群衆が見にやって来るものとは全く別のものを捜しているのだ。成り行きで発せられた言葉から、あのでっち上げることができないため実地に捉えなくてはならない人物の特徴の一つが彼にはっきりとわかることになるだろう。あのととも素朴に注意を向けている顔付きをもとに、画家は夢見ていた表情を描くことだろう。他の人の耳には何でもないある物音が、音楽家の耳を打ち、ある和声を思い付かせるだろう。夢想到に耽った思索家、哲学者にとってさえ、そうした外の喧騒は有益で、嵐が海原を掻き混ぜるように、その諸観念を混ぜ合わせ揺さぶることだろう。……天才たちの大部分も偉大な遊歩者だったのだ。ただし、勤勉で実り豊かな遊歩者だったのである。……芸術家や詩人が一番仕事に没頭しているのは、彼らが一番仕事が見えそうに見える時のことが多い。」(Larousse 1872, 436) [M20a, 1]

すなわち、『19世紀ラルース百科事典』に示されている理解では、遊歩者は単なる暇人でも怠け者でも野次馬でもない。遊歩者はいわば観察する人であり、研究する人でもありうるということになる。

それでは次に、『バサージュ論』などの著作に書きとめられた、ベンヤミンの遊歩者に関する思索を見てみる。*⁴

遊歩者は、「アスファルトの上をいわば植物採集して歩く。」(I, 538) そもそも都市は遊歩にとって聖なる土地である[M2a, 1]。したがって、ここで問題となる風景は、風景

(Landschaft)ではなく、あくまでも都市風景 (Stadtschaft) である。そして、パリこそが遊歩者の約束の地である。この点について『パサージュ論』の記述を見てみよう。

「遊歩者というタイプをつくったのはパリである。それがローマでなかったというのは奇妙なことである。それはどうしてであろうか。ローマでは、夢さえもおきまりの道を行くのではなからうか。そしてこのローマは、神殿、建物に囲まれた広場、国民的聖所があまりに多いので、一つ一つの舗石や店の看板ごとに、階段の一段ごとに、そして建物の大きな門をくぐるたびごとに、歩く人の夢のなかにこの街はそっくり入り込みにくいのではなからうか。また多くの点ではイタリア人の国民性によるのかもしれない。というのもパリを遊歩者の約束の地にしたのは、あるいはホフマンスタールがかつて名づけたように「全く生活だけからつくられた風景」にしたのは、よそ者ではなく、彼ら自身、つまりパリの人々なのだからである。風景——実際パリは遊歩者にとって風景となるのだ。あるいはもっと正確に言えば、遊歩者にとってこの街はその弁証法的両極へと分解してゆくのだ。遊歩者にとってパリは風景として開かれてくるのだが、また彼を部屋として包み込むのだ。」[M1, 4]^{*5}

そして、パリの街路が遊歩者にとってくつろぎのすまいとなっている様子をベンヤミンは次のように描写している。

「遊歩者は、市民が自宅の四方の壁のなかに住むように、家々の正面と正面の間に住む。彼にとっては、商店のきらきらと光る看板が、市民にとっての客間の油絵と同じもの、それ以上のもの、壁の装飾なのであり、家の壁が書斎の机であって、彼は彼のメモ帳をそこに押しあて

る。新聞売りの屋台が彼の書庫、喫茶店のテラスが彼の出窓だ。彼は一仕事おえるとその出窓から、彼の住居の全体を見わたす。」(I, 539)

そして、遊歩者が最も好み、遊歩の本質を最もよく示すのは、パリのパサージュである。「もしパサージュがなかったら、遊歩があればほど意味深いものにまで発展することは、難しかったろう。」(I, 539) こうして、ローマでもベルリンでもロンドンでもなく、パリのパサージュにのみ、真の遊歩者は姿を現わすことになる。

ところで、社会学者ディヴィッド・フリズビーらのモダニティ論においては、遊歩者に関する多くの思索が展開されている。そこでは、近森も指摘するように(近森2007, 21-22)、「観察する人」としての遊歩者のもつ、次のような3つの性格が重視されている。

- (1) 主知主義的性格
- (2) 主意主義的性格
- (3) 認識論的主体としての性格

これをさらに詳しく説明すると次のように言えるだろう。

- (1) 遊歩者は街路に共在する他者や事物に対して、批判的な距離をとる。群衆に紛れこんだ時にも、遊歩者は完全に周囲に溶けこんでしまうわけではない。
- (2) 遊歩者は群衆のなかで匿名性を保持する一方で、擬態や変装の能力をもち、自在に都市のあらゆる場所に入り込んでゆくことができる。
- (3) 遊歩者は街路の人々や事物を観察し、解読することを通じて、断片的な情報をもとに意味ある布置連関を再構成してゆく。

もしも、遊歩者がこうした3つの性格のみをもつのであれば、認識論的主体としての近代的自我と何ら変わらなくなってしまう、従来の近

代哲学における自我論との違いは消滅してしまうであろう。しかしながら、ベンヤミンの記述を丁寧に読めば、遊歩者はこれだけにとどまるものではないことがすぐにわかる。遊歩者は、「観察する人」「研究する人」であると同時に、「陶醉する人」でもある。この点を『パサージュ論』にしたがって見てみよう。

「長い時間あてどもなく街を彷徨った者はある陶醉感に襲われる。一步ごとに、歩くこと自体が大きき力をもち始める。それに対して、立ち並ぶ商店の誘惑、ピストロや笑いかける女たちの誘惑はどんどん小さくなる。次の曲がり角、遙か遠くのこんもりした茂み、ある通りの名前などがもつ磁力がますます抗い難いものとなってゆく。やがて空腹に襲われる。だが、空腹を満たしてくれる何百という場所があることなど、彼にはどうでもいい。禁欲的な動物のように、彼は、見知らぬ界限を徘徊し、最後にはへとへとに疲れ果てて、自分の部屋に——彼にとってよそよそしいものに感じられ、冷やかに迎え入れてくれる自分の部屋に——戻り、くずおれるように横になるのだ。」[M1, 3]

さらに、遊歩者における陶醉は、現在の経験のみに閉じ込められたものではないことが重要である。

「遊歩者が街を徘徊する時に耽っているあの追憶としての陶醉の素材となるのは、彼が感覚的に見るものだけではない。この陶醉はしばしば、ただの知識を、いや揆をかぶった資料さえも、自ら経験したり生きたものであるかのように吸収しつくすのである。こうした感じ取られた知識というのは、何よりも口伝えによって人から人へと伝わるものである。ところが、こうした知識は19世紀においてはほとんど気が遠くなるほどの膨大な量の文献のなかに定着する

ようになった。「パリの街路という街路を、家という家を」描き出したルフーズ^{*6}以前でも、夢見心地ののらくら者というパリ風景のなかの点景は描かれていた。こうした文献を研究するのは、夢見ることに没頭すべく用意された第二の人生のようなものである。そして彼がそうした本から得たことは、アペリティーフの前の午後の散歩の際にはっきりした姿をなす。実際に彼は、パリに最初の乗合馬車が走ったころ、ノートルダム・ド・ロレット教会の裏のところで三頭目の加勢の馬が馬車につながれたことを知ったなら、そこの急坂を靴の底でもっと強烈に感じるはずではなからうか。」[M1, 5]

ここで語られる陶醉 (Rausch) は、現在に閉じ込められたような、単なる陶醉ではない。この陶醉は過去へと開かれた、「追憶としての陶醉」(anamnestisches Rausch) でもある。そして、こうした「追憶としての陶醉」の素材は、ただ遊歩者が街路を彷徨う時に、目の前に現われるだけでなく、19世紀においては知識として膨大な量の文献のなかに定着するようになったのである。それゆえ、遊歩者であるベンヤミンは、パリを遊歩するだけでなく、パリの国立図書館の閲覧室で、文献のなかを彷徨いながら、「文学的モンタージュ」[N1a, 8]の方法を駆使して、『パサージュ論』の仕事に取り組むことになるのだ。

ここで、『パサージュ論』においても引用されているブルーストの『失われた時を求めて』(『スワン家の方へ』)のなかにある、ある文章が大切なものとして浮かび上がってくる。これをベンヤミンは、「ブルーストにおける遊歩の原理」と呼ぶ。

「すると、そうしたいっさいの文学への関心とは全く無関係に、それとはなんの結びつきも

なしに、突然一つの屋根、石ころに反射する太陽の光、道路の匂いが私の足をとめるのだ。それは、それらが私に贈ってくれた特別の快樂のためでもあるが、またそれらが私が見るものの向こうに何かを隠している、それをとりに来てみよと誘っていながら、私が努力してもそれを露わにすることはできない風だったからでもある。」[M2a, 1]

ここで語られる「私が見るものの向こうに隠されている何か」とは、いったい何か。「遊歩者の回帰」によれば、遊歩者の関心をひくもの、遊歩者が探し求めているものは、「形象」である(Ⅲ, 196)。プレストの言う、この「私に見るものの向こうに隠されている何か」もまた「形象」である。そして、『パサージュ論』においては、これが「集団の夢」と結びつくことになるのである。

2. 形象

ここで、「形象」(Bild) という概念に着目する。ベンヤミンは、単に「形象」という概念を使用することも多いが、「弁証法的形象」(dialektisches Bild) という表現もしばしば用いている。例えば、『パサージュ論』に書きとめられた、次の断片を見てみよう。

「過去がその光を現在に投射するのでも、また現在が過去にその光を投げかけるのでもない。そうではなく形象のなかでこそ、かつてあったものはこの今と閃光のごとく一瞬に出あい、一つの状況を作り上げるのである。言い換えれば、形象は静止状態の弁証法である。なぜならば、現在が過去に対してもつ関係は、純粋に時間的・連続的なものであるが、かつてあったものがこの今に対してもつ関係は弁証法的だ

からである。つまり、進行的なものではなく、形象であり、飛躍的である。——弁証法的な形象のみが真の(つまりアルカイックではない)形象である。」[N2a, 3]

ここで言う「形象」とは果たして何か。この概念を理解する鍵は歴史性である。ベンヤミンは、現象学における本質と比較しつつ、詳細に論じている。

「形象を現象学における「本質性」と区別する点は、形象がもっている歴史的な指標である。(中略) 形象が歴史的な指標を帯びているということは、ただ単に形象がある特定の時代に固有のものであるということのみならず、形象というものは何よりもある特定の時代においてはじめて解読可能なものとなるということの意味している。しかも、「解読可能」となるということは、形象の内部で進展する運動が、特定の危機的な時点に至ったということなのである。そのつどの現在は、その現在と同時的なさまざまな形象によって規定されている。そのつどの今 (Jetzt) は、ある特定の認識が可能となる今なのである。この今においてこそ、真理には爆発せんばかりに時間という爆薬が装填されている。(中略) 解読された形象、すなわち認識が可能となるこの今における形象は、すべての解読の根底にある、批判的・危機的で、危険な瞬間の刻印を最高度に帯びているのだ。」[N3, 1]

このように、「形象が歴史的な指標を帯びているということ」は、ただ単に形象がある特定の時代に固有のものであるということのみとどまるものではない。これは、形象というものは何よりもある特定の時代においてはじめて解読可能なものとなるということの意味している。しかも、「解読可能」となるということは、

形象の内部で進展する運動が、特定の危機的な時点に至ったということなのである。

そもそも「弁証法的形象」は、ベンヤミン固有の造語である (Hillach 2000, 186)。この概念を解釈するために、ベンヤミンによるアドルノからの引用を見てみよう。

「弁証法は形象において静止し、歴史的に最も新しいもののなかに、とうの昔に過ぎ去ったものとしての神話を、すなわち、根源の歴史としての自然を引用するのである。それゆえ、(中略) 弁証法と神話の区別をなくすような形象は、まさに「大洪水以前の化石」なのだ。こうした形態は、ベンヤミンの表現を使って、弁証法的形象と称してもよいかもしれない。」[N2, 7]

この文章は、アドルノのキルケゴール論における、「形象」と「神話」に関するキルケゴールの記述に対する、コメントールの一節である。

ここから読み取れるように、ベンヤミンにおいては、「弁証法的形象」とは、歴史の連続を破壊する「引用」を通じて構成される過去の形象のことである。そして、この概念は、ゲーテの「原現象」やライプニッツの「モノダ」に結びつけられる。まず、ゲーテの「原現象」についての言及を見よう。

「弁証法的な形象とは、ゲーテの分析対象に対する要求、すなわち真の総合を提示するという要求にかなうような歴史対象の形式である。それは歴史の原現象である。」[N9a, 4]

「ゲーテの真理概念について記したジンメル」の叙述を勉強した際に、私には次のことが非常にはっきりとしてきた。つまり悲劇論で用いた根源という私の概念は、このゲーテの基本概念的、自然の領域から歴史の領域への厳密かつ異

論の余地なき転用であるということである。根源、それは原現象という概念を、異教的な観点で捉えられた自然の脈絡から、ユダヤ教的に捉えられた歴史のさまざまな脈絡に移し入れたものである。」[N2a, 4]

さらに、モノダに関しても次のように述べられる。

「歴史の事象を歴史の流れの連続性からもぎ取ることが要求されるのは、そのモノダ的構造に基づいている。このモノダ的構造はもぎ取られた事象においてはじめて露わになる。言い換えれば、このモノダ的構造が露わになるのは、歴史における対決という形態を通してなのである。この対決が歴史的事象の内部(いわば内臓)をなしていて、諸力や関心の全体が新たに若返った形でこの対決に加わってゆく。この歴史的事象のもっているモノダ的構造のおかげで、歴史的事象は自らの内部に自分固有の前史と後史が写し出されているのを見出すのである。」[N10, 3]

ここから、「弁証法的形象」は、過去のすべてを潜在的に含んだ「歴史の原現象」または「モノダ」として、歴史における対決という形態を通して、歴史のすべてを新たに見つめ直す可能性の地平を現在において開くものであることがわかる (cf. 柿木 2008, 455-456)。

3. 集団の夢

ベンヤミンの語る「集団の夢」(Traum des Kollektivs) とは何か。『パサージュ論』の記述を詳細に見ながら考えてみる。

「19世紀とは、個人的意識が反省的な態度をとりつつ、そういうものとしてますます保持されるのに対して、集団的意識の方はますます深

い眠りに落ちてゆくような時代（ないしは、時代が見る夢）である。ところで、眠っている人は、（中略）自分の体内での大宇宙旅行に出かけるのであり、しかもその際、彼の内部感覚は途方もなく研ぎ澄まされているので、目覚めている健康な人にとっては、健康な体の活動となっているような自己自身の内部のざわめきや感じ、例えば、血圧や内臓の動きや心臓の鼓動や筋感覚が妄想や夢の形象を生み出し、鋭敏な内部感覚がそれらを解釈し説明することになるのだが、夢見ている集団にとっても事情は同じであって、この集団はパサージュにおいておのれの内面に沈潜してゆくのである。われわれは、この集団をパサージュのうちに追跡し、19世紀のモードと広告、建築物や政治を、そうした夢幻の帰結として解釈しなければならない。」[K1, 4]

19世紀という近代社会を生きる人々は、誰もが個人としては、いわば近代的自我として反省的態度をとりつつ生きている。しかしながら、集団としては全く逆に深い眠りに落ちているというのである。そして、実は、こうした「集団の夢」は、人間の内面に閉じ込められているのではなく、外的世界に住み処をもっているとベンヤミンは主張する。「集団の夢の家とは、パサージュ、冬園、パノラマ、工場、蠅人形館、カジノ、駅などのことである。」[L1, 3] *7

パサージュが集団の夢の家であるとは、いかなる意味であろうか。19世紀のパリの人々は目覚めることなく、その異様さに気づくことなく、パサージュを生み出し続けた。パリのパサージュの大半は、繊維商業界の好景気を背景に、1822年以降の15年間に一挙に建設されたのである（cf. V, 45）。鹿島も指摘するように、パサージュや駅は、「集団の夢」であるからこ

そ、19世紀の集団的意識は、「仮装癖」[K1a, 6]により、鉄骨建築という最新テクノロジーに仮装を施し、隠蔽しようとする「夢の変形作業」にしたがって、パサージュ、冬園、工場、駅などという夢を見続け、これらを生み出し続けたのである（鹿島 1996, 230）。

そして、「集団の夢」は、19世紀の都市においては、「群衆の夢」でもある。遊歩者は、「群衆のなかに隠れ家を求める。」また、「群衆はヴェールであり、それを通してみると、遊歩者の目には見慣れた都市がファンタスマゴリー*8と映る。」（V, 54）群衆は19世紀の都市に歴史上はじめて登場したものであり、匿名性を本質的特徴とする。

モダニティ論の分析に関わって、すでに言及したように、遊歩者は群衆のなかに隠れ家を求め、彼らに紛れることで匿名性を確保するのだが、両者は質的に全く異なる存在である。群衆と遊歩者の本質的な違いが確認されるべきであろう。19世紀という産業化された時代に、機械仕掛けのように歩く群衆のなかで、遊歩者は全く異なるリズムで歩く。遊歩者は「一個の人格としてぶらつきながら分業が人々を専門的職業人に仕立てるのに対して、また人々の勤勉さに対してプロテストしていた。1840年には一時、亀をパサージュで散歩させることが上品なこととみなされた。遊歩者は好んでそのテンポで歩いた。」（I, 556）

また、次のような記述も見られる。

「遊歩の弁証法。一方では、この男は、誰からも注目されていると感じていて、まさにいかがわしさそのもの。他方では、全く人目に触れない、隠れこもった存在。おそらくは「群衆の人」（»Der Mann der Menge«）*9が繰り返しているのはこの弁証法なのであろう。」[M2, 8]

しかしながら、こうした群衆は社会的仮象でしかないことに注意が払われるべきである。ベンヤミンによれば、ヴィクトール・ユゴーと同様、ボードレールも、「群衆という形で現われる社会的仮象を、仮象だと見抜くことができなかつた」(I, 569)とされる。ボードレールは、無批判に、群衆に対して指導的イメージを与え、英雄の避難場所と性格づけていた。しかし、それとは異なり、ベンヤミンは群衆が社会的仮象でしかないことを鋭く指摘することができたのである。

ところで、「集団の夢」も夢である以上、覚醒があるはずである。「集団の夢」を問題にする以上、覚醒を問わなければならない。ところが、19世紀においては、集団的意識はますます深い眠りに落ちてゆくのであり、覚醒は必ずしも容易ではない。

覚醒について、ベンヤミンは、ブルーストを踏まえて、次のように述べる。

「覚醒とは、夢の意識というテーゼと目覚めている意識というアンチテーゼの総合としてのジントーゼなのではなからうか。もしそうであるならば、覚醒の瞬間とは「この今における認識可能性」と同じなのではなからうか。この認識可能性に満ちた今において物事はその真のそのシュルレアリスティックな相貌を被るのである。こうしてブルーストにあっては、人生のなかで最高に弁証法的な断絶点、つまり、覚醒の瞬間から生涯を書き起こすことが重要なのである。ブルーストは、覚醒する本人の空間の叙述から始めている。」[N3a, 3]

ここで、覚醒が「この今における認識可能性」と結びつけられることが重要である。また、覚醒を巡って、ベンヤミンはルイ・アラゴン『パリの農夫』と自分の仕事を比較して次のように

記している。

「アラゴンが夢の領域にとどまろうとするのに対して、私の仕事では覚醒がいかなる状況であるのかが見出されなければならない。アラゴンの場合には、印象主義的な要素——それは「神話」と言われるが——が残されている。(中略)これに対して、私の仕事では、「神話」を歴史空間のなかへと解体することが問題なのである。それは、過去についての未だ意識化されていない知を目覚めさせることによるのみ可能となる。」[N1, 9]

なお、ベンヤミンにおいては、覚醒は、個人のものにとどまらず、世代の生活にも拡張されて考えられている。

「個人の生活と同様、世代の生活にも行きわたっている一つの段階的過程としての目覚め。眠りは世代の一次的段階である。ある世代の青春期の経験は、夢の経験と多くの共通点をもっている。この青春期の経験の歴史的形態が夢の形象である。どの時代もこうした夢に興味を示すという側面を、つまりは子どもの側面をもっているものである。19世紀にとって、こうした側面がかなり明瞭に浮かび上がってくるのは、パサージュにおいてである。」[K1, 1]

「集団の夢」は、19世紀という時代が見る進歩の夢である。それゆえ、ここでの目覚めは進歩を夢見る近代の「時代の夢」からの覚醒である。群衆として多くの人々が進歩の夢を見続けている時、この覚醒の瞬間、「認識が可能となる今」は、誰にいつどのように到来するのか。形象の内部で進展する運動が、特定の危機的な時点に至った時、それは誰にいつどのように現われるのだろうか。

つねに「形象」を探し求めている遊歩者、「観察する人」「研究する人」であると同時に、「陶

酔する人」でもある遊歩者にこそ、覚醒の瞬間、「認識が可能となる今」が訪れる。遊歩者は、パサージュの店頭に並べられた商品をいつも眺めて街を彷徨っている。これらの商品は、進歩を夢見る「集団の夢」が生み出し続けるものである。ところが、商品は、過去のすべてを潜在的に含んだ「歴史の原現象」または「モノド」としての弁証法的形象が構成される手がかりを遊歩者に与える。

ファンタスマゴリーである商品は、実在と意味の間の裂け目をうちに含んでいる。それは、『ドイツ悲劇の根源』での表現を使えば、「具象的存在と意味作用の間の深淵」（I, 342）と呼ぶうる裂け目である。もちろん商品はこの裂け目をいつでも誰にでも晒すというのではない。しかし、時代遅れになったパサージュのショーウィンドウにある、時代遅れの商品は、偽装に抗い、この裂け目を示すことがある。それに気づくのは、進歩の夢を見続けている群衆ではない。つねに「形象」を探し求めて彷徨い、「観察する人」「研究する人」であると同時に、過去へと開かれた「陶酔する人」でもある遊歩者にこの裂け目は現出する。この時、商品は弁証法的形象となり、「古びたもの」がもつ「革命的エネルギー」（II, 299）とともに、遊歩者に「最高に弁証法的な断絶点」[N3a, 3]である覚醒の瞬間、「認識が可能となる今」が到来するのである。

4. 想起のコペルニクスの転回

これまでの研究で明らかになったように「認識が可能となる今」において、遊歩者は19世紀の「集団の夢」、進歩という「時代の夢」から目覚める。しかし、ただ目覚めるのではない。

ベンヤミンによれば、目覚めと想起は極めて密接な関係にある。

この想起は、ベンヤミンの歴史的唯物論としての歴史哲学において、極めて重要な役割を果たし、「想起のコペルニクスの転回」と呼ばれる。

「弁証法についての全く独自の経験というものがある。生成における「進行」をすべて否定し、見かけは「発展」に見えるすべてのものが、細部にいたるまで極めて精密な組み立てをもつ弁証法的転換であることを明らかにするような、有無を言わせぬ劇的な経験とは、夢から目覚めることである。（中略）歴史学の新たな弁証法的方法は、われわれが「既在」と呼ぶ夢が、実はそれに関係しているような目覚めの世界としての現在を経験するための技法なのである。既在を夢の想起において経験すること！——してみれば、想起と目覚めは極めて密接な関係にある。つまり、目覚めこそは、追悼的想起の弁証法的転回であり、そのコペルニクスの転回なのである。」[K1, 3]

さらに、歴史叙述に関係づけて、次のようにも語られる。

「歴史を観るに当たってのコペルニクスの転回とはこうである。つまり、これまで「既在」は固定点とみなされ、現在は、手探りしながら認識をこの固定点へと導こうと努めているとみなされてきたが、いまやこの関係は逆転され、既在こそが弁証法的転換の場となり、目覚めた意識が突然出現する場となるべきなのである。これからは政治が歴史に対して優位を占めるようになる。もろもろの事実とは、たった今われわれにふりかかってきたばかりのものとなり、そして、この事実を確認するのは想起の仕事である。（中略）既在についての未だ意識されざ

る知が存在するのであり、こうした知の掘り出しは、目覚めという構造をもっているのである。」[K1, 2]

このようにして、遊歩者に到来する目覚めは、同時に想起でもあるということになる。そして、この想起は従来の「一般史」(Universalgeschichte)に代表される歴史主義とは全く異なる、「歴史的唯物論」による歴史を構成する「歴史学の新たな弁証法的方法」となるものである。

それでは、このように目覚めとともに想起をするのは誰なのか。この主体は誰なのだろうか。『歴史の概念について』において、次のように述べられている。「過ぎ去った事柄を歴史的なものとして明確に言表するとは、それを「実際にあったとおりに」認識することではなく、危機の瞬間にひらめくような想起を捉えることを言う。歴史的唯物論にとっては、危機の瞬間において歴史の主体に思いがけず立ち現れてくる、そのような過去の形象を確保することこそが重要なのだ。」(I, 695)

すなわち、遊歩者とは、ベンヤミンの考える歴史的唯物論の主体、救済(Rettung)としての歴史認識[N11, 4]を行う歴史の主体になりうる存在者なのである。それは、いわば『歴史の概念について』に登場する「歴史の天使」(I, 697)なのである。

結論

これまでの研究から、本論文の冒頭に掲げた問いに対する答えは、明らかである。遊歩者に対して、19世紀という時代の集団的意識である「集団の夢」は、仮装癖により仮装されつつ、姿を現わす。「集団の夢」は、「パサージュ、

冬園、パノラマ、工場、蠟人形館、カジノ、駅など」を家とする。この夢は、遊歩者になりえない群衆には、決して認識可能なものとして現出することはない。彼らはいつまでも夢を見続け、決して覚醒することはないのである。

しかし、つねに「形象」を探し求めている遊歩者、「観察する人」「研究する人」であると同時に、「陶醉する人」でもある遊歩者には、覚醒の瞬間、「認識が可能となる今」が訪れる。そして、この目覚めは同時に「歴史学の新たな弁証法的方法」である想起でもある。

遊歩者は、このようにして集団の夢から目覚める。そして、目覚めとともに想起し、救済としての歴史認識を行う「歴史の主体」になりうるのである。^{*10}

凡例

ヴァルター・ベンヤミンの著作からの引用箇所は、括弧内に以下の全集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, Unter Mitw. von Theodor W. Adorno und Gershom Scholem, hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp, 1972-1989.

ただし、『パサージュ論』(*Das Passagen-Werk*)に所収の断片については、断片番号により示す。

なお、引用に際しては、既存の邦訳書を参照したが、訳文は、必要に応じて神谷自身が訳し変えている。

註

*1 この表現は言うまでもなく、ベンヤミンの『パサージュ論』を構成する概要(Exposés)のタイトルを踏まえたものである。「パリ-19世紀の首都」(Paris, die Hauptstadt des X IX. Jahrhunderts / Paris, Capitale du X IXème siècle) (cf. V,

45-77)

- * 2 遊歩者について書かれたベンヤミンのテキストはいくつもある。『パサージュ論』のほかには、フランツ・ヘッセル『バルリン散策』(Spazieren in Berlin)の書評として書かれ、雑誌『文学世界』(Die Literarische Welt)に掲載された「遊歩者の回帰」(1929年)(Ⅲ, 194-199)と「ボードレールにおける第2帝政期のパリ」の「Ⅱ 遊歩者」(1937-38年 成立)(Ⅰ, 537-569)が特に重要である。
- * 3 そもそも『19世紀ラルース百科事典』に項目として、「遊歩者」が載せられていること自体が興味深い。フランスにおいて、この時代にラルース百科事典を読む階層にとって、遊歩者が、無視しえない、興味深い現象であったということである。
- * 4 これらはもちろん体系的な思索ではないのだから、「遊歩者」であるベンヤミンの、「遊歩者」を巡る遊歩の記録とでもいうべきものである。
- * 5 この引用とほぼ同じ文章が「遊歩者の回帰」にある(Ⅲ, 195)。「遊歩者の回帰」にあり、『パサージュ論』のこの引用では省かれている文章のなかに、次のものがある。「もろもろの大いなる追憶や歴史的な戦慄——真の遊歩者にとってそんなものは所詮くだらないものであって、そんなものは彼は喜んで旅行者にまかせてしまう。」ここには、遊歩者にとっては、「大きな物語の大きな記憶」は、邪魔者でしかないことが極めて明瞭に示されている。
- * 6 (Lefeuve 1875)
- * 7 この時代の駅については、シヴェルブシュの鉄道旅行の歴史に関する研究における記述が興味深く、有益である(Schivelbusch 1987)。この研究には、ベンヤミンへの言及がしばしば見られ、彼からの影響を強く受けたものであることがわかる。
- * 8 ファンタスマゴリー (Phantasmagorie/ fantasmagorie) は、19世紀にヨーロッパで大流行した幻

灯ショーの名称に由来する表現である。マルクス『資本論』では、商品の物神的性格を示すために、「ファンタスマゴリーの形態」という形でこの語の形容詞形が用いられている(Marx 1979, 86)。しかし、マルクスにおいては、まだ特別な述語ではなく、光学的比喩として用いられている。ベンヤミンはこれを踏まえて独自に術語化したと考えられる(古川 2006, 97-98/101-104)。しかし、ベンヤミン自身はこの語に明確な定義を与えてはいない。

ファンタスマゴリーについて、死の前年1939年に書かれた『パサージュ論』に関する最終的な見通しと言える概要「パリ—19世紀の首都」のフランス語草稿には、次のように書かれている。

「拙著の調査は、文明のこの物象化された表象によって、われわれが前世紀から受け継いだ新しい生活形態や経済的技術的基盤に立つ新しい創造が、いかにして一つのファンタスマゴリーに突入するのかを示したいのである。これらの創造はこの「天啓/照明」(illumination)をイデオロギー的置換によって理論的に受けるだけではなく、感覚的現前の直接性においてこそ受けるのである。これらの創造は、ファンタスマゴリーとして顕在化するのである。鉄骨建築の最初の活用である「パサージュ」はそのように現われるし、娯楽産業との結びつきがはっきり在り方を語る万国博覧会もそのように現われる。同じ類の現象のうちに、市場のファンタスマゴリーに身をまかせる遊歩者の体験が挙げられる。人間たちが典型的な様相のもとしてしか現われない、市場のこういったファンタスマゴリーに対応して、住んでいる部屋に、自らの個人的私生活の跡を是非残したいという人間の強烈な傾向によってつくられる室内のファンタスマゴリーがある。文明そのもののファンタスマゴリーとは、オースマンという代表選手を得て、バリの変貌にその顕在化した表現を見せたのであ

る。」(V, 60-61)

ここでは、『パサージュ論』の目的が、19世紀の新しい生活形態や経済的技術的基盤に立つ新しい創造が、感覚的現前の直接性において、いかにして一つのファンタスマゴリーに組み込まれるのかを示すこととして明記されているのである。

- * 9 「群衆の人」(»Der Mann der Menge«)は、エドガー・アラン・ポーの小説のタイトルである。この作品については、「ボードレールにおける第2帝政期のパリ」の「II 遊歩者」のなかで詳しく分析されている。そこでは次のように述べられている。

「遊歩者は、ポーにとって何よりも自分の属する社会のなかで安心してられない人間なのである。だから、遊歩者は群衆を求めたのであり、この点から遠くないところに、遊歩者が群衆のなかに隠れる理由も求められるであろう。」(I, 550)

- * 10 ベンヤミンの考える、こうした遊歩者の先達は、おそらくはブルーストであった。ベンヤミンが1929年に発表した「ブルーストのイメージについて」のなかに極めて印象深い一節がある。

「一番大事なことが言われねばならない時、それは必ずしも大声で宣言されるとは限らない。そしてひそかに打ち明けられる時でも、それは必ずしも一番懇意な人、一番近い人、一番進んでその告白を聞く用意をしていた人に打ち明けられるとは限らない。さて、自分の本心を任意の誰かに伝える、そうした慎ましやかな、すなわち、老獪で、かつ軽はずみなやり方をするのは、人間だけに限ったことではなく、時代もそうしたことをするものだとすれば、19世紀に関して、この老化した時の流れからまことに驚くべき打ち明け話を聞き、その場ですばやく記録したのは、ゾラでもアナトール・フランスでもなく、若きブルースト、このとるに足らぬスノップ、遊びに夢中な社交界の花形

だった。(中略)ブルーストがはじめて、19世紀に回想録を残す能力を与えたのだ。彼以前には緊張を孕まない時空であったものが、力の場となり、そこに極めて多様な電流が、彼以後の作家たちによって生ぜしめられた。」(II, 314-315)

また、ブルーストの好奇心を巡って、次のように述べているのも注目に値する。

「スノップの態度とは現実の生活を、化学的に純粋な消費者の立場から、鍛えられた目で徹底的・組織的に観察することにほかならない」(II, 319)

19世紀の「集団の夢」は、パリの遊歩者であるブルーストに認識可能なものとして現出した。そして、そもそもブルーストが『失われた時を求めて』の執筆を通して、徹底的に分析したスノビズムこそが、研究と観察の態度を遊歩者と共有するものだった。ベンヤミンは彼から強いインスピレーションを受けて、19世紀の「集団の夢」を遊歩者として研究したのである。

参考文献

- Bolz, Norbert und Witte, Bernd (hrsg.) (1984): *Passagen: Walter Benjamins Urgeschichte des neunzehnten Jahrhunderts*, W. Fink.
- Buck-Morss, Susan (1983): Benjamin's *Passagenwerk*: Redeeming Mass Culture for the Revolution, *New German Critique* 29 (Spring/Summer), 211-240.
- (1986): The Flâneur, the Sandwichman and the Whore: The Politics of Loitering, *New German Critique* 39 (Fall), 99-140.
- (1989): *The Dialectics of Seeing: Walter Benjamin and the Arcades Project*, MIT Press.
- Frisby, David (1994): The flâneur in social theory, in: Tester, Keith (ed.) (1994): *The Flâneur*, Routledge.
- Hillach, Ansgar (2000): Dialektisches Bild, in:

- Opitz, Michael und Wizisla, Erdmut (hrsg.) (2000): *Benjamins Begriffe*, Suhrkamp.
- Larousse, Pierre (1872): *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle*, tome 8, Administration du Grand dictionnaire universel.
- Lefeuve, Charles (1875): *Les anciennes maisons de Paris : histoire de Paris, rue par rue, maison par maison*, 5 éd., C. Reinwald/A. Twietmeyer.
- Marx, Karl (1979): *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, MEW Bd. 23, Dietz.
- Menninghaus, Winfried (1986): *Schwelkenkunde, Walter Benjamins Passage des Mythos*, Suhrkamp
- Schivelbusch, Wolfgang (1987): *The Railway Journey: The Industrialization of Time and Space in the 19th Century*, University of California Press.
- 石川清子 (2005) : 「アラゴンを読むベンヤミン—『パリの農夫』から『パサージュ論』へ—」、『静岡文化芸術大学研究紀要』 Vol. 5、静岡文化芸術大学、13-20
- 今村仁司 (2000) : 『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』岩波書店
- 大宮勘一郎 (2008) : 『ベンヤミンの通路』未来社
- 柿木伸之 (1996) : 「破片の記憶を語る—ベンヤミンの〈翻訳〉と歴史の他者—」『哲学論集』第25号、上智大学哲学会、65-79
- (1998) : 「歴史のミクロロジー—ベンヤミンの歴史哲学におけるいくつかのモチーフについて—」、日本現象学会編『現象学年報』第14号、北樹出版、119-131
- (1999) : 「救出と反復—ベンヤミンとハイデガーの歴史についての思考」、日本哲学会編『哲学』第50号、法政大学出版局、263-273
- (2008) : 「ベンヤミン」、野家啓一編『哲学の歴史第10巻—現象学と社会批判』、中央公論新社
- 鹿島 茂 (1996) : 『『パサージュ論』熟読玩味』青土社
- 近森高明 (2007) : 『ベンヤミンの迷宮都市—都市のモダニティと陶酔経験』世界思想社
- 古川千家 (2006) : 「『パサージュ論』の中心概念《ファンタスマゴリア》について」、『愛媛大学法文学部論集人文学科編』21、愛媛大学法文学部、95-118
- * 本論文は、日本学術振興会・平成20年度科学研究費補助金・基盤研究 (C)、研究課題名：集合的記憶を媒介とした世代間コミュニケーションに関する現象学的研究 (研究代表者：神谷英二、課題番号：19520025) における研究成果の一部である。